日本医史学雑誌　第54巻第4号（2008）　393–398

仙台の医学校において 1900年と1901年に講義された解剖学史

坂井　建雄

順天堂大学医学部　解剖学・生体構造科学

仙台における医学校は，1880年（明治13）に設立された宮城医学校を前身とし，1887年（明治20）に設立された第二高等中学校の医学部として始まった．このとき官立の医学校としては東京の帝国大学医科大学に加えて5校の高等中学校医学部（千葉，仙台，岡山，金沢，長崎）があり，これ以外には公立3校（大阪，京都，愛知）と私立4校（東京3校，熊本1校）の医学校のみであった．第二高等中学校医学部は1894年（明治27）6月の高等学校令により第二高等学校医学部となり，さらに1901年（明治34）4月に分離独立して仙台医学専門学校となった．仙台における医学校は，明治後期に名称と組織がしばしば改変されながら，日本で有数の医学校であり続けた．

東北大学には，明治時代の医学生の授業ノートとして，柳澤廣三郎，齋藤龍祥，小野豊三郎の3名のものが残されている．このうち柳澤と齋藤のノートには解剖学総論の講義が含まれ，そこに解剖学史についての講義が記録されている．この解剖学史は，20世紀初頭に仙台の医学校で解剖学の授業の中で教えられた解剖学史の講義の記録として貴重であるだけでなく，魯迅の「藤野先生」に描かれた最初の授業についての問題を解決する重要な手がかりとなっている．柳澤は1900年（明治33）に入学し，同年に仙台に赴任した敷波重治郎が最初に教えた学生の一人である．齋藤は1901年（明治34）に入学し，同年に藤野厳九郎が仙台に赴任し，敷波と藤野が分担して解剖学を教えている．

柳澤廣三郎は長野県出身で，仙台の第二高等学校医学部に1900年（明治33）に入学し，1904年（明治37）に仙台医学専門学校を卒業している．卒業後は陸軍軍医となり小倉衛戍病院に務めている．柳澤廣三郎の授業ノートは，東北大学史料館に所蔵されており，「解剖学　骨筋　壹」と表題のついた1冊のみである．本文に頁番号はないが323頁を含み，総論が3頁，骨学が127頁，靱帯学が60頁，筋学が133頁である．解剖学の歴史は，総論の第2–3頁に見開きで記されている．講義を担当したのは敷波重治郎である．

齋藤龍祥は埼玉県出身で，仙台医学専門学校に1901年（明治34）に入学し，1905年（明治38）に卒業している．卒業後は陸軍軍医となり旭川の第七師団軍医部に勤務した．齋藤龍祥の授業ノートは，東北大学附属図書館医学分館に所蔵されており，仙台医学専門学校での講義を記録した15冊からなり，この他に陸軍軍医学校での1911年（明治44）の講義ノート1冊がある．このうち解剖学の授業ノートは2冊ある．解剖学の第1巻は敷波の担当した講義を記録したもので，総論，骨学，靱帯学，内臓学，感覚器学，発生学，顕微鏡用法，組織学実習標本リストからなり，第2巻は藤野の担当分で，筋学，血管学，神経学，局所解剖学を含んでいる．解剖学史の内容は，総論の3–6頁にわたって書かれている．講義を担当したのは敷波重治郎である．

敷波重治郎（1872–1965，明治5–昭和40）は，金沢に生まれて1894年（明治27）に第四高等中学校医学部を卒業して外科医となり，解剖学専攻を希望して1897年（明治30）に東京帝国大学医科大学助手となった．小金井良精教授のもとで筋の破格に関する肉眼解剖の研究に従事し，また1899年（明治32）に帰国した大澤岳太郎助教授から発生学の基礎と組織学標本の作成法を学ん

だ．1900年（明治33）に第二高等学校医学部の解剖学の教授として迎えられた．

以下に，柳澤廣三郎と斎藤龍祥の授業ノートから解剖学の歴史を，原文のまま訂正せずに掲載する．旧字および片仮名は新字および平仮名に改めた．

〔柳澤廣三郎の授業ノートから，解剖学の歴史〕

解剖学の歴史

Anatomieは理学の未だ発達せざりし太古より行はれたり即ちBefore the centry 400年Hippokrates（B.C. 460年に生れB.C. 377に死す）始めて解剖学なるものを研究せり然れとも人類に対しては未だ行はざりきAristoles氏は人類を解剖せり其后紀元1400年Mundinus（1475より156）に至る八拾六年間Sylviusは深夜解剖学を研究せりまたEustachius氏は熱心に解剖学を研究せり其后英吉利人Hervy氏は血液の循環を発見して各臓器の機能を研究せり是の人によりて生理学なるもの始めて考出せらる十六世紀に至り始めて顕微鏡を用ひて病理的の発見をなせし人は以太利のMalpigh氏同じくMorgagni氏，和蘭のLewenhock氏同じくSwammerden氏なり茲に於て始めて病理解剖出でたりフランスのBichat氏は一般解剖学を始めて考出し体制学は独乙人始めて案出せり其后各国大に解剖学を進歩して独乙にては十九世紀に於て解剖学者としてWilchow, Johannes Müller, Kölliker, Schleiden，Schwann等出てZelleを発見しHenleは系統解剖学を発見し組織学者としてはHenle及Slähe出てたり動物解剖学と人類解剖学と比較するものは即ち比較解剖なり斯学者にGegenbar, Wiedersheim出で体制学（発生学）者としてはHertwig及His出で人類解剖学者としてはWilchow及びWildeyerの二人出でたり是れと同時に各国に於て有名なる学者褚に輩出せりFranceにてはRanvier，以太利にてはGolgi，IspaniaにてはCajal出でたり

本邦に於ける解剖学の歴史

我国に於ても太古より不完全ながらも解剖学なるもの行はれたり即ち黄帝素問霊根なる書に解剖学なるものを記載せりといふ其后宝暦四年山脇東洋といふもの（今より百四十年前）始めて人体を解剖する事を許されたり而して是人の謂ふ所に由れば解剖学を研究するものは是非実地に施行せざる可らず事而して已れの研究せし諸器官を其蔵器を記載して世に公にせり其后明和八年三月四日杉田玄伯大槻玄沢前野蘭化なる三人合同して小塚原に於て罪人を解剖し蘭書と比較して一つの書を表はすに至れり其后廣島の人星野良悦は解剖を実施し又大坂の人各務文献は人目を盗みて深夜解剖をなせり維新前大村益次郎氏も少しく解剖を実施せりといふ説あり又近年に至りては三宅先生松本順先生も亦是れを行ひたりといふ降りて明治に至り始めて田口博士解剖を学問と比較して是れを行へり明治十年に至り小金井博士大澤博士等大に解剖学上に心を注ぎて斯学研究の上に於て一大進歩を見るに至れり

〔齋藤龍祥ノートから，解剖学の歴史〕

Geschichte der Anatomie

解剖学は既に紀元前に希臘の先哲Hippokrates氏の始めしものにして，460 v.C.にInsel Kosに生れ，377 v.C.にLarissaに死せし人なり．当時は解剖する器械なく，主として動物を解剖して人類に及せしものにして，実に幼稚なるものなり．筋，腱，神経の区別は勿論無く，血管は判全すれども動静脈の区別は全く不定にして殊に血管は肝臓より発するものと推定せり，次に解剖を研究せし人はAristoteles（384 v.C.–323 v.C.）にして，同じく希臘人にして博物学者なり．此の人に至りて血管の動，静を明にしたり然れども，尚動脈にはPneuma精気ありと誤解したり．

紀元後に至りてはClaudius Galenus（131–201 n.C）あり出で，大に解剖の発達を計りたり．此の時に初めて脳神経の解剖をなし，其区別を精しく知る事を得たり．希臘，アラビヤ，埃及地方は特に進歩をなせり．其後伊太利に向て大に其の学術進歩を輸入せり．伊太利にてはVesal（1514–1564）出で，熱心に研究し今迄の誤解を改良し大に進歩を計れり．其他同時代に有名なるはMondinus（1275–1326），Sylvius（1478–1555），Eustachius（1574に死す），等にして，其後第16世紀乃至第

17世紀に至りて英国より有名なる学者出でたり．即William Harvey（1578–1658）なり．此の人は血液の循環の大発明をなせり．Harvey以来は人体の臓器の位置及形状漸次明白になれり．のみならず各臓器の作用を研究するに至り，茲に初めてPhysiologie生理学起るに至れり．爾来有名なる人物次第に大く起これり．即Aselli（1581–1626），Vesling（1568–1649），Rüdbeck（1630–1702），Hoffmann（1621–1698）及Wirsung（1643に死す）等なり．

然し此の時代迄は皆肉眼的にして，刀及摂子のみにて解剖したるものなり．然るに顕微鏡発明せられて以来，肉眼以外に研究する事を得，益々発達するに至れり．顕微鏡を専ら用たる人は，伊太利のMalpighi（1628–1694），HollandのSwammerdam及Leeuwenhoeck等なり．又Italia Morgagniは之れを応用して病理を研究し，始めてPathologische Anatomie病理解剖及Physiologische Anatomie生理解剖を起せり．是れより有名なる学者盛に排出せり．彼の仏人Cuvier（1769–1832）は出でゝ始めて比較解剖の基を開き，仏人Bichat（1771–1802）は初て組織学を開けり．后独逸人Wolff及Pander等は初て発育学を起せり．以後19世紀までは欧州各国競て発達し，就中独逸最も盛大なりき．各国皆発達し解剖の範囲は漸次拡張したり．彼の独人Henleは系統解剖書を著し自ら実験して挿図したり．又彼の有名なるJohannes Müllerの門人Schleiden及Schwann等は，凡て動物及人体は細胞より構成せらるのことを発見したり．后細胞の作用細胞の蕃殖に就て研究したる人は独人Flemmingなり．又Zellenlehre細胞学を応用して細胞病理学を起したるは有名なるWirchowなり．独逸に於て組織に有名なるはKölliker及Stöhrにして，比較解剖に有名なるはGegenbaur及Wiedersheim等なり．又胎生学としてはHertwigにして，人種解剖としてはWaldeyer（近時）及Wirchowなり．其の他の国に於ては英吉利にBowmann, Scharpey, Quain等あり，仏国にはRanvier, Retzius, Sappe等あり，伊太利にはGolgiあり，SpaniaにはCajal等の諸氏大に有名なり．

Japanische Geschichite der Anatomie

日本にて解剖の起こりたるは西洋諸国に比すれば遥に遅し．是れ交通の開けざりしに由るものにして，昔は支那より漢方を伝来せしのみなり．其時支那より渡来せしものは素問霊枢なれども，誤多くして進歩し居らず．而して我が日本，解剖の起こりしは今より184年前宝暦四年に山脇東洋初めて人体を解剖し自から解剖したる事を蔵志なる書に乗せたり．彼れ自からいう，解剖を研究するには必ず自ら刀を操て解剖せざる可からずと．後，明和八年三月四日に杉田玄伯，大槻玄澤，前野蘭化等相集りて解剖せり．是れ蘭書によりたるものにして，江戸附近小塚原に於て罪人の屍体を解剖し解体新書を著せり．是れ蘭書を基としたるものにして当時の高尚なる書物なりき．後，各務文献（大坂の人），星野良悦，川口信任（解屍論を著す），池田義之（解剖図譜を著す），宇田川玄真，緒方洪庵，三宅艮斎，林洞海等出でて，益々解剖を盛大となせり．彼れ大村益次郎氏も解剖をなせりという．而して緒方洪庵等は天保一三年解剖社を建立し実験究理的に研究したり．明治前に於けるものは尚ほ，当仙台に於て寛政十年十二月（殆んど今より104年前）に日本の解剖の三番目に木村寿頴なる人解剖せり．此の人は長崎に至り長崎に至り蘭学を治め，楢林重兵衛の門人となりて研究せり．後，寛政九年に帰仙し翌年自ら解剖せり．然し其記録は後世に残らず．当時は解剖するものは新平民同様に見做されたるものにして，為に官途にも附く得はず．寿頴は石碑を解剖したる人の為に建設せり．是れ，明治七年此の七北田を開拓するときに偶然にも発見したるものにして，時の戸長，岡寛一郎の所有となれり．当時，岡氏は伊達政宗公の時に耶蘇教徒の為に建立せしものと仮想せり．然るに元荒町鈴木省三の研究によりて，其の解剖屍体なることを伴全せり．其の石碑は中央に大く供養と書き，其側に寛政十年十二月十九日とあり．其の基部にKrncia. . . とありたり．然るに明治二十三年の洪水の為めに流去して，今は其の痕跡をも止めず．又文化六年（今より96年前）に医学館を初めて今の仙台憲兵屯所の所に立つ．当時百騎町といひ，今は東二番町と

なれり．其建設者は渡辺道化氏にして元寺小路渡辺道作の祖先なり．道化は一の関の人佐々木仲澤をして助教となせり．此の人は文政五年六月初めて解剖し，其記事及図を一巻として著作あり．其巻物は今尚伊達家の所蔵となる．

明治の初年東京神田和泉橋に仮小屋を製し娼妓のみきの屍体を解剖せり．之れは一日一夜に行ひしものにして，先づ乱雑のものなりき．明治四年独逸人 Müller 及 Hoffmann 日本に聘せられて来り．東京大学に属し解剖所を設けて学理的に解剖せり．是れ日本に於ける解剖学理的の初めにして，田口和美初めて解剖す．明治六年初て解剖実地教授を行う．其時助手としては今田束，玉越与平等にして田口博士監理者たり．時の解剖所は今の下谷区藤堂邸の所なり．明治九年今の本郷の解剖室を建て盛に解剖を行いぬ．時既に田口氏教授となれり．明治十三年独逸より Dr. Disse 聘せられて日本に来り．明治十八年小金井良精教授となる．爾来今日まで解剖盛大となり益々発達せり．

〔注釈と解説〕

この2つのノートに記録された敷波重治郎の講義は，1900年（明治33）と1901年（明治34）に行われたものであるが，分量においても内容においても大きな違いがある．1900年（明治33）の柳澤ノートでは解剖学史は2頁の見開きに収まり，1901年の齋藤ノートでは4頁にまたがっている．挙げられている人名も世界の解剖学史については柳澤ノートで26人，齋藤ノートで41人であり，日本の解剖学史については柳澤ノートで12人，齋藤ノートで23人である．（表1）

1900年（明治33）の柳澤ノートに記録された解剖学史の講義は，分量が少ないだけでなく，内容においても重大な遺漏がある．解剖学史の中で当然取り上げられるべきガレノスとヴェサリウスが抜け落ちていることである．さらに人名の表記にも誤りが多い．他の医学生のノートでは，人名の表記はおおむね正確であり，人名に関しては講義中に板書をしていたものと考えられる．柳澤の誤記によるものもあると思われるが，敷波の思い違いによるものもかなり含まれているのではないだろうか．

このように柳澤ノートの解剖学史には大きな欠陥があるが，これは敷波重治郎の準備不足によるものと思われる．解剖学史は解剖学の講義の冒頭で行われている．敷波が1900年（明治33）の9月に仙台に着任した直後である．しかもこの赴任の話は，この年の夏期休暇中に第二高等学校医学部の山形仲芸主事が東京に来て田口和美教授と直談判し，力不足を理由に固辞する敷波を押し切る形で決まったものである．解剖学の冒頭の解剖学史の講義が準備不足であったのも無理はない．しかし翌年の解剖学史の講義は充実したものに仕上げている．

敷波が解剖学史の講義を作るために参考にし得た資料がいくつかある．この当時によく用いられた教科書に解剖学史が記述されており，日本語のものでは奈良坂源一郎の『解剖大全』全3巻，ドイツ語のものではヒルトルの『人体解剖学教科書』，ラウベルの『人体解剖学教科書』，ゲーゲンバウルの『人体解剖学教科書』に解剖学史がかなり詳しく書かれている．このような資料を利用して，敷波は世界の解剖学史の準備をすることができたはずである．そのため世界の解剖学史については，古代から19世紀に至るまで重要な人物がバランスよく選び出され，また近代においてはドイツを中心にイギリス，フランスなど各国についても紹介している．

しかし日本の解剖学史については，参考となるまとまった著作は見あたらない．江戸時代においては山脇東洋の『蔵志』と杉田玄白と前野良沢らによる『解体新書』を取り上げ，江戸後期の蘭学者を紹介しているが，解剖学とあまり縁のない三宅艮斎，林洞海の名も挙げられている．

仙台の事蹟として木村寿禎の解剖が紹介されているのは特筆される．木村寿禎（1773–1834, 安永2–天保5）は江戸時代後期の仙台藩の医師で，1798年（寛政10）に七北田（現仙台市）の刑場で刑死体の解剖を行った．しかし人体解剖に対する偏見から非難を浴び，藩から処分を受けた．解剖の事蹟を刻んだ供養碑が1876年（明治9）に発見され，この石碑には木村寿禎の名前がオランダ

語でKimoera Zioetehと書かれていた．石碑の実物は失われたが，拓本が東北大学附属図書館医学分館に所蔵されている．また拓本をもとに石碑が復元され，仙台市の仏眼寺に残されている．

明治時代の解剖学については，敷波が在職した東京帝国大学医学部のことが紹介されている．1869年（明治2）の美幾女の解剖は，わが国の特志解剖第1号として特筆されるが，これは一日一夜で行った乱雑なものであるとし，その後にミュルレルとホフマンによって解剖所が設けられ学理的な解剖が始まったと評価しているところは，この当時の東京大学医学部関係者による評価を反映しているものと考えられ，興味深い．

表1　柳澤ノートと齋藤ノートの解剖学史に登場する人物一覧

人名	生没年（和暦）	生没年（西暦）	出身	柳澤ノート	齋藤ノート
ヒポクラテス Hippocrates		BC460–BC370	古代ギリシャ	○	○
アリストテレス Aristoteles		BC384–BC322	古代ギリシャ	○	○
ガレノス Galenos		129–216	古代ローマ		○
モンディーノ Mondino de’ Luzzi		1275–1326	イタリア	○	○
シルヴィウス Sylvius, Jacobus		1478–1555	フランス	○	○
エウスタキウス Eustachius, Bartolomeo		1500/10–1574	イタリア	○	○
ヴェサリウス Vesalius, Andreas		1514–1564	ベルギー、イタリア		○
ハーヴィー Harvey, William		1578–1657	イギリス	○	○
アセリ Aselli, Gaspare		1581–1625	イタリア		○
ヴィルズング Wirsung, Johann Georg		1589–1643	ドイツ		○
ヴェスリング Vesling, Johann		1598–1649	ドイツ、イタリア		○
ホフマン Hoffmann, Moritz		1622–1698	ドイツ		○
マルピーギ Malpighi, Marcello		1628–1694	イタリア	○	○
ルドベック Rudbeck, Olof		1630–1702	スウェーデン		○
レーウェンフク Leeuwenhoek, Antoni van		1632–1723	オランダ	○	○
スワンメルダム Swammerdam, Jan		1637–1680	オランダ	○	○
モルガーニ Morgagni, Giovanni Battista		1682–1771	イタリア	○	○
ヴォルフ Wolff, Caspar Friedrich		1734–1794	ドイツ		○
キュヴィエ Cuvier, Georges		1769–1832	フランス		○
ビシャ Bichat, Marie-Francois-Xavier		1771–1802	フランス	○	○
パンダー Pander, Heinrich Christian von		1794–1865	ロシア		○
レチウス Retzius, Andreas Adolf		1796–1860	スウェーデン		○
クエイン Quain, Jones		1796–1865	イギリス		○
ミュラー Müller, Johannes Peter		1801–1858	ドイツ	○	○
シャーピー Sharpey, William		1802–1880	イギリス		○
シュライデン Schleiden, Jacob Mathias		1804–1881	ドイツ	○	○
ヘンレ Henle, Friedrich Gustav Jacob		1809–1885	ドイツ	○	○
シュヴァン Schwann, Theodor Ambrose Hubert		1810–1882	ドイツ	○	○
サペー Sappey, Marie Philibert Constant		1810–1896	フランス		○
ボーマン Bowman, William		1816–1892	イギリス		○
ケリカー Kölliker, Rudolf Albert von		1817–1905	ドイツ	○	○
フィルヒョウ Virchow, Rudolf Carl		1821–1902	ドイツ	○	○
ヒス His, Wilhelm		1831–1904	ドイツ	○	
ランヴィエ Ranvier, Louis Antoine		1835–1922	フランス	○	○
ゲーゲンバウル Gegenbaur, Carl		1836–1903	ドイツ	○	○
ヴァルダイエル Waldeyer-Hartz, Wilhelm von		1836–1921	ドイツ	○	○
レチウス Retzius, Gustav Magnus		1842–1919	スウェーデン		○

人名	生没年（和暦）	生没年（西暦）	出身	柳澤ノート	齋藤ノート
フレミング Flemming, Walther		1843–1905	ドイツ		○
ゴルジ Golgi, Camillo		1843–1926	イタリア	○	○
ヴィーデルスハイム Wiedersheim, Robert Ernst Eduard		1848–1923	ドイツ	○	○
シュテール Stöhr, Philipp		1849–1911	ドイツ	○	○
ヘルトヴィヒ Hertwig, Wilhelm August Oscar		1849–1922	ドイツ	○	○
カハール Cajal, Santiago Ramon y		1852–1934	スペイン	○	○
山脇東洋	宝永2–宝暦12	1705–1762	日本	○	○
前野良沢	享保8–享和3	1723–1803	日本	○	○
杉田玄白	享保18–文化14	1733–1817	日本	○	○
河口信任	元文4–文化8	1739–1811	日本		○
星野良悦	宝暦4–享和2	1754–1802	日本	○	○
各務文献	宝暦5–文政2	1755–1819	日本	○	○
大槻玄沢	宝暦7–文政10	1757–1827	日本	○	○
池田義之		生没年不詳	日本		○
渡辺道可	?–文政7	?–1824	日本		○
宇田川玄真	明和6–天保5	1770–1835	日本		○
木村寿禎	安永2–天保5	1773–1834	日本		○
佐々木中沢	寛政2–弘化3	1790–1846	日本		○
緒方洪庵	文化7–文久3	1810–1863	日本		○
林洞海	文化10–明治28	1813–1895	日本		○
三宅艮斎	文化14–明治1	1817–1868	日本	○	○
大村益次郎	文政7–明治2	1824–1869	日本	○	○
松本良順	天保3–明治40	1832–1907	日本	○	
ミュラー（ミュルレル）Müller, Benjamin Carl Leopold		1824–1893	ドイツ		○
ホフマン Hoffmann, Theodor Eduard		1837–1894	ドイツ		○
田口和美	天保10–明治37	1839–1904	日本	○	○
今田束	嘉永3–明治22	1850–1889	日本		○
玉越與平		生没年不詳	日本		○
ディッセ Disse, Joseph Hugo Vincent		1852–1912	ドイツ		○
小金井良精	安政5–昭和19	1859–1944	日本	○	○
大澤岳太郎	文久3–大正5	1863–1920	日本	○	